

「カルチャー報告」

丸の内と文学 — 明治・大正編 —

はじめに

皆さんおはようございます。明治から大正期の丸の内と文学についてお話をさせていただきます金子と申します。よろしくお祈りします。

では早速、話に移りたいと思います。「丸の内と文学」ということで、まずは明治維新後の丸の内についてお話していきたいとします。明治に入りまして、丸の内の大名屋敷は新政府高官の官舎や邸宅、役所などに使用されました。その後、丸の内から日比谷にかけて兵役街が出現していきます。明治五年（一八七二）の三月に和田倉門内の旧会津藩邸が出火しまして、大名小路から京橋までが全て焼け出されてしまいます。ここに明治二年の地図がありますの

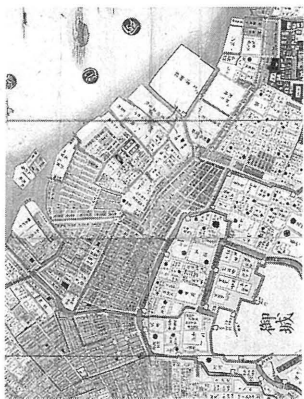


図1 明治2年「東京大絵図(官版)」〈86300736〉

でご覧ください。そのの上の方に和田倉門がありまして、詰所と書かれていますところが会津松平家の上屋敷になっており、そこから出火したということです。（図1）この地図に載っている所は、

大部分が焼け出されてしまったようです。また大名小路という地域がありまして、左下の部分は一面まだ大名屋敷のような形になっている所があります。ところが明治十年（一八七七）の地図を見ます

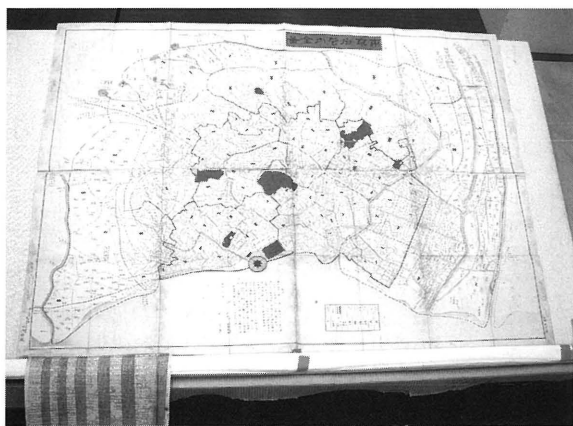


図2 明治10年「東京府管内全図」〈89203497〉

と、その火事によって

焼失した箇所に陸軍関連の土地が現れます。

（図2）東京府の勤工場もできまして、陸軍の所属地、陸軍大隊営とか、日比谷の方に練兵場ができています。

岩崎弥之助と

二丁ロンドン

丸の内と関わりのある人物として岩崎弥之

*金子未佳

*学芸員

助（一八五一〜一九〇八）という人物がいるのですが、この人物についてお話ししていきます。丸の内は明治二十二年（一八八九）、東京市区改正設計告示というのを受けまして、陸軍兵営地が麻布に移転することになります。

麻布に移転をして新兵舎を造るにあたり、お金の無い新政府が岩崎弥之助にどうか買ってくれないかと話を持ちかけたそうです。当時、松方正義（一八三五〜一九二四）が大蔵大臣だったのですが、直接岩崎のもとを訪ねてきて「買いとってほしい」と言ったと伝えられております。明治二十三年の三月、三菱の二代目社長である岩崎弥之助が丸の内の買い取りを承諾します。当時のお金が二二八万円という大金で払い下げるのですが、この二二八万円という額は当時の東京市予算の三倍ぐらいの額だったと言われております。弥之助はこんな所を買って何に使うのだと質問された時に、「竹を植えて虎でも飼うさ」という様なことを言ったそうです。そう言った弥之助ですが、実は、今は三菱ケ原と呼ばれる草の生い茂っているような原っぱであるけれども、そこを世界的に有名なロンドンのオフイス街「ロンバード街」のような丸の内を造っていいこうという計画を持っておりました。

明治二十七年（一八九四）七月、三菱の第一号館ビルディングが完成します。この第一号館ビルディングというのは、イギリスの建築家のジョサイア・コンドルが建てたビルディングです。第一号館ビルディングができた後に、二号館ビルディング、三号館ビルディング、東京商業会議所というビルディングができて、この四つのビルディングを

合わせて「三菱村の四軒長屋」と呼ばれました。この四軒長屋のビルディングは赤煉瓦の建物でした。他にも続々とビルディングができて、「二丁ロンドン」時代が到来します。明治三十七年（一九〇四）から大正元年までの時期にあたりまして、大名小路から日比谷通りに至る馬場先通り沿いの所に次々と赤煉瓦建築ができます。先ほど弥之助の話にあった、ロンドンの「ロンバード街」をモデルにした赤煉瓦の建築群だったので、「二丁ロンドン」という風に呼ばれました。

「二丁ロンドン」時代の丸の内について、文学者がどう書いたか、という事をひとつご紹介いたします。

高浜虚子（一八七四〜一九五九）の「丸の内」（『大東京繁昌記』連載「三十年前」という随筆の中に、「やがてぼつぼつと家が建つて、その四軒長屋の間々が建てふさがるやうになつて、俗にこれを「二丁ロンドン」と呼ぶやうになつた。仲通り一帯が建ち並んだのは四十四五年の頃であるとか」と書いてあります。この時期に日比谷公園も開園します。日比谷公園は明治三十六年（一九〇三）六月一日に開園しました。昨年（註：当報告は二〇〇四年のもの）はちようど開園百周年にあたる年でした。日比谷公園は、さきほどの地図にありました陸軍の練兵場の跡にできました。

日比谷公園

日比谷公園を造っている最中の頃だと思つていますが、一年前の明治三十五年（一八七〇）に、正岡子規（一八六七〜一九〇二）が『病牀六尺』の

中でこう述べています。「東京人の癖として、公園は上野の様なのに限るといふ人が多いけれども、必ずしも上野が公園の模範とすべきものであるとは定められない。日比谷の公園なども廣い芝生を造つて廣ツパ的公園としても善いではないか。無暗矢鱈に木ばかり植ゑて一寸散歩するにも鼻を衝く様な窮屈な感じをさせるのが公園の目的でもあるまい」。この一節は、明治三十五年六月二十七日付の新聞『日本』掲載の、「病牀六尺」第四十六回に記されています。子規は約三カ月後に亡くなっておりますので、実際日比谷公園の開園を見届けることができませんでした。

では、日比谷公園を見た文学者はどのような感想を抱いたのかについて話を進めてまいります。

上司小剣かみつをさしよけん（一八七四～一九四七）は、大正八年（一九一九）に書いた「夜の公園」という文章の中で、このように述べております。「いよいよ公園になった日比谷の原を見た時には、情ないといふ感じが込み上げて来た。あまりに期待の多すぎた為めのみでもない。小さな、稚い樹木をば、殆んど人の頭を通過させることなしに、荷車で運んだまま植え込んで、池や石が処々に散らばつてゐる。只それだけであつた」。最初に公園を見た印象は、そのようにとても悪いものだったらしいのですが、その後続く文章では、「けれども歳月の力は、人間の拙い技にも巧に療治して呉れる。三年、五年と経つうちには、木も繁り、石にも苔が着き、水も自ら岸を洗つて、兎にも角にも庭らしいものになつた。さうして夜は殊に醜い部分をばかして、都に唯一の新時代の公園らしい気分を起こさせるところ

が出現した」と、日比谷公園の良さを実感しています。

有楽座と帝国劇場

日比谷公園の他には、有楽座と帝国劇場が建てられました。有楽座は、日本初の洋風劇場として明治四十一年（一九〇八）に開場しました。その後、大正九年（一九二〇）に帝国劇場の経営となりましたが、大正十二年（一九二三）の関東大震災で焼失するに至ります。帝国劇場の方は、明治四十四年（一九二一）の二月十日に完成し、四日から一般公開されました。帝国劇場は日本最初の純洋式劇場ということで、その後、関東大震災で焼失した後にも再建されて現在に至ります。

これは、当館の図書室にある『帝劇十年史』という本ですが、こちらに帝国劇場の全景が載っております。（図3）帝国劇場について文学者がどのように取り上げたかと言いますと、高浜虚子が「東京市」という長編小説で触れています。この「東京市」は未完で終わる小説です。主人公のちよだ新聞の記者が、日本座という劇場の



図3 『帝劇十年史 増補版』〈90605244〉

完成前の取材をしているという場面ですが、「天井の絵を画く為に見聞に来てゐる画家らしい男もある。階段に大理石を埋めてゐる男もある。石灰を運ぶ女もある。彼の雑

然たる物音は是等の人々によりて惹き起こさるので、其中に例の鉄に穴を鑄つて居る鑿の音はまだ板も何も張られて無い舞台の下の奈落から起る」と、建設中の日本座内部の描写があり、その後、「此の八十何万円とかの金のかかつた千五百人を容るるに足るとかいふ日本唯一の劇場日本座の開場後の事を考へて見て」と、建設費や収容人数についての説明があります。お察しの通り、この「日本座」は帝国劇場をモデルにしています。

高浜虚子は、先ほどの「丸の内」に、「今から十五六年前に帝劇が工事を起して、鐵をたたく鎚の音が盛んに響いてゐる時分、私は或人に案内せられその中にはひつて見た。あぶない足場を渡りながら、およそこれが舞台、これが楽屋といふ説明を聞いた」と書いています。この時の体験を元にして、「東京市」の小説が生まれた訳です。完成した際には、虚子は来賓の一人として招待されています。その時の様子については、「赤いじうたんをしき詰めた階段の上を皆が恐る恐る踏んだ。中には物なれた素振りですら平気で闊歩するらしく見える人もひそかに靴のよごれを気にした」とあり、当時の日本人は、土足のままで絨毯を踏むことに抵抗を感じ、まだまだ西洋式の習俗に不慣れな様子が、この描写から窺い知れます。

当時の丸の内について、こちらの明治四十五年（一九一〇）の地図をご覧ください。（図4）先ほどの明治二年（一八六九）の地図と明治十年（一八七七）の地図と比べると、ビルディングが建ち並び、まして、だいぶ景観が変わっていることが分かります。この辺りに、明治火災保険、明治生命保険・海上保険、三菱のビルディング、ここ

が商業会議所、その隣が帝国劇場、その少し下に郵船会社と高田商会がありまして、その下に東京市役所があります。まだ東京駅はできていませんので、中央停車場敷地がこちらにあります。有楽座と帝国ホテルがこちら、日比谷公園がここになります。

「大東京繁盛記」と高浜虚子

先ほどから取り上げております、高浜虚子の「丸の内」という隨筆ですが、これは「大東京繁盛記」の中の一作品なのです。「大東京繁盛記」は、昭和二年（一九二七）三月十五日から十月三十日まで、『東京日日新聞』夕刊の第一面に、一九一回にわたり連載されました。こちらは『東京日

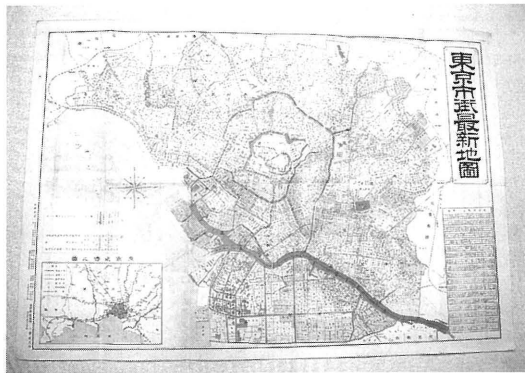


図4 明治45年「東京市街最新図」〈93200858〉

日新聞』の夕刊を抜粋したものです。高浜虚子の他、芥川龍之介（一八九二〜一九二七）や北原白秋（一八八五〜一九四二）、徳田秋声（一八七一〜一九四三）、田山花袋（一八七一〜一九三〇）、泉鏡花（一八七三〜一九三九）などが執筆しています。新聞連載後に『大東京繁盛記』として出版されました。この本は江

戸東京博物館七階の図書室にありますので、お時間がありましたらご覧になって下さい。

高浜虚子の「丸の内」については、三月十五日は「ドンが鳴ると」、十六日は「大玄関」、その後、「東京駅」、「活動がはじまる」、「能舞台」……と続きます。「丸の内」は、昭和二年（一九二七）の時点での東京駅や丸ビルといった丸の内界隈の見聞と、それぞれが出来た当時の状況を細かく描写し、それ以前と対比させているのが特徴といえます。二十三日掲載の「三十年前」には、三〇年前のちようど三菱ケ原時代の丸の内について書かれています。高浜虚子の部分でご紹介した多くは、ここから引用しています。「明治三十五年頃、私は神田の猿楽町に住まつてゐて、屢々用事があつて麹町の内幸町に行つた。竹橋を渡つて和田倉門をはひり、二重橋前を桜田門に出で、それから司法省の前を通つて行くのであるが、ゆるゆる歩いてゐると一時間では行けなかつた」と書いてあるように、高浜虚子は、三菱ケ原の四軒長屋時代からの丸の内の変遷を、実際に見て、体験してきた人物なのです。そして、丸の内の移り変わりを、小説、随筆、短歌など、多くの作品に遺しておりますので、「文学者がみた丸の内」という趣旨で話をいたしますのに、やはり高浜虚子が中心になつてしまつた訳です。

「三十年前」は、「その時分の丸の内はただ暗く静かに、又さびしく物騒な天地であつた。夜分などはこの明治生命の前を通ると、向ふは真暗な原つばで、ただ大空に星が輝いてゐるばかりであつた。今の東京駅のあたりも闇の続きで、その向うに僅に京橋辺の灯が見

えた」と続いています。挿し絵は石井鶴三が描いており、三菱ケ原時代の丸の内を描写していますが、これを見ても、ビルがぼつぼつとあつて、他は全て原つばのような空き地であつたことが分かります。練兵場跡と四軒長屋については、「その頃日比谷はまだ公園にならず、葦の生えた空地であつた。練兵はもうやらなかつたが、練兵場の面影がまだそのままに残つてゐた」「三菱ケ原の四軒長屋と稱へた頃であとは狐狸の住んでゐさうな原であつた」と綴つています。

高浜虚子は、「大東京繁昌記」の「丸の内」のように、回想記のような形で明治時代の丸の内について書いた随筆の他に、明治期に小説「丸の内」を發表しています。

小説「丸の内」

虚子の書いたこの作品は、明治三十三年（一九〇〇）六月発行の雑誌『ホトトギス』に、「丸の内」というタイトルで發表されました。タイトルの頭に、わざわざ「小説」と付けられています。主人公の「余」が丸の内を通つて帰る途中に見聞きしたことをまとめた作品です。一度目の道中に道連れとなつた電話交換手の女性のうち、顔色の悪い娘、こちらの娘がとても美人で、それで強く印象に残つたと書いてあるのですが、美人というだけではなく、顔色の悪さから病気なのではないかと気に留めます。その娘との出会いから三ヵ月後に、「余」は一人の車夫と出会い、偶然、娘の父親であることを知ります。娘が結核で亡くなつた事を聞き、ひどく娘に同情した「余」は車夫に車の代金の他に余分に差し出す、という内容の小説



図5 『東京の三十年』
〈93530065〉

です。

この小説にも当時の丸の内について、「其向ふは明治生命保険会社から東京府庁が見える辺まで一面広場になってゐて、其広場の枯草は所々に立つてゐる枯木と共にいづれも嵐の為にぶんなぐられてゐる。其枯草の彼方の隅から彼方の隅迄横切りつつある二人連れの外、砂煙がのこして行つた光景の内には一人も人影が見えぬ」と書いておりまして、明治三十年代の丸の内の情景がよく分かります。

高浜虚子は、正岡子規が提唱した写生文を受け継いだ人物です。写生文について簡単に説明しますと、誇張をしたり脚色をしたりせずに、見たまま感じたままに事物を書くというものですが、この「丸の内」は小説とも言い難く、写生文に近い作品と言えるのではと思われまます。

続いては、高浜虚子以外の文学者について述べまます。

田山花袋と岡本かの子

まずは、田山花袋を取り上げまます。田山花袋は、当時の丸の内をどのように書いているのでしょうか。花袋の『東京の三十年』（図5）は、大正六年（一九一七）に発表された作品です。内容は回想記で、田山花袋の自伝ともいえるもの

です。「日比谷は元は練兵場で、原の真中に大きな銀杏があつて、それに秋は夕日がさし、夏は砂塵、冬は泥濘で、此方から向うに抜けるにすら容易でなかつた。ことに、今の有楽門から桜田門に通ずる濠に添つた路は、雨が降ると路がわるく、車夫は車の齒の泥濘に埋れるのを滴したところである。そしてそれが尠くとも明治二十七八年まで、さういう風であつた」と綴られています。明治三〇年前後の日比谷や丸の内は、高浜虚子も触れていましたが、広大な原っぱで、晴れば砂嵐、雨が降れば泥だらけになるといふ、通行には本当にひどい場所だつたようです。

次に、岡本かの子（一八八九～一九三九）を取り上げまます。岡本かの子は「丸の内草話」という小説を、昭和十三年（一九三八）から十四年にかけて書いておりますが、こちらの小説にも、その主人公が自分の子供時代の事を回想しているシーンがあります。「私の子供だつた時分、明治三十年ぐらゐまでの丸の内は、三菱ヶ原と呼ばれて、八万余坪は一面に草茫茫とした原野だつた」「私たち子供が、男女まじりに戦ごっこをして、築山からなだれ降り、追撃戦に移り、組んづほぐれつ泥まみれになつた池の渚あたりは、いま明治生命の建物になつてゐる」「明治四十年頃に近くなつて、中央停車場はじめ、三菱ヶ原全面に、建築の敷地割だけは出来たやうである。町名はもとからであつたが、まだそれも原の中にあつた。やや建築らしいものは、馬場先門外にだけ商業会議所を中心に煉瓦造りの建ものが赤くちらほら見え始めた」と綴られています。

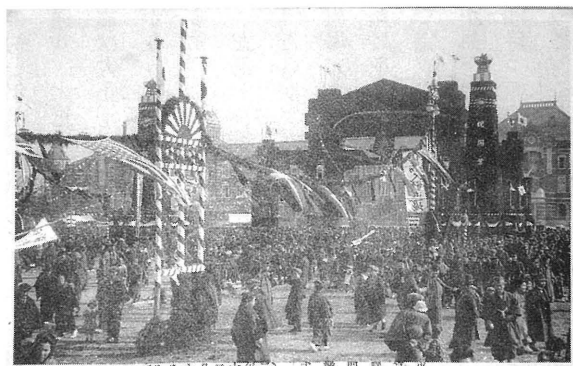


図6 「東京駅開業式(三年二月十八日)絵葉書」<94652135>

東京駅開業

大正期の丸の内の出来事として、「東京駅」の開業と「一丁ニユ一ヨーク」の形成があります。今申し上げた通り、明治末期までの丸の内は、三菱ケ原と呼ばれる一面の原っぱが残されておりました。特に北半分はそのままの状態で、東京駅の開業に伴い開発が始まります。大正三年(一九一四)十二月十八日に東京駅ができて、それを契機に新しいビルディングが建築されます。そのビルディングは四軒長屋時代と違って赤煉瓦造りではなく、鉄筋コンクリート造りのアメリカ式のオフィスビルが建て始められます。まずは東京海上ビルが大正七年(一九一八)

の九月にできて、その後丸ビルが大正十二年(一九二三)の二月に、そして

日本郵船ビルが同年の五月にできます。この時代には丸の内のビルディングの総数が六三棟になります。このようにして徐々に三菱ケ原から近代的なオフィス街としての丸の内に変貌していきます。

これは、東京駅の開業式を伝える当時の新聞と、当

館所蔵の絵葉書(図6)です。高浜虚子の「丸の内」には、東京駅の開業についても書かれています。「今の三菱村がまだ原であった時分、その原の一隅に今の東京駅が出来た。その頃の東京駅はただ広くつて、旅客があちらに一人こちらに一人、駅員も尋ね廻らねば見当たらぬといふ状態であった。「こんな広い不便なものを拵へてどうする積りであらう」などといふ眩きをきいたものだ。それが今はどうであらう。急行の出る前などは旅客が一杯で身動きができぬ有様である。「折角作るなら、もうすこし広いものを作つて置けばいいに」そんなつぶやきが聞こえるやうになつた」とあり、開業当時は、ほとんど使われない状況だった東京駅が、オフィス街が建ち並ぶにしたがい、乗降客であふれてしまった様子を知ることができます。

画家の木村莊八も、『東京の風俗』という本の中で、三菱ケ原について触れています。その中で注目したいのは次の一文です。「やがて大正年度にかけて、三菱ケ原がすっかりコンクリートで埋まつた時に、――さしもの武蔵野も、その最後の一草まで、ここで遂に新時代の姿に衣更へを完了したといふことが出来る」と、三菱ケ原がオフィスビルに変わった所で、古い時代の丸の内が消滅したことを、哀愁をこめて表現しています。

「丸ビル」誕生

大正期の東京を襲った大きな災害というと、関東大震災をあげることができます。あまり知られていないのですが、実は関東大震災

の約一年前に大地震が発生しているのです。関東大震災はご存知の通り、大正十二年（一九二二）九月一日に発生しましたが、この地震は大正十一年四月二十六日に起こりました。当時の新聞をみると、かなりの被害状況で、この地震が相当激しかったことがよく分かります。

大正十一年の地震の発生によって、丸の内がどのような被害を受けたのかと言いますと、ちょうど丸ビルを建設している最中で、工事に大亀裂ができて死傷者もでたという記事が載っていました。丸ビルは、大正九年（一九二〇）の七月に工事を開始し、あと一月で完成するという時に地震が直撃します。ビルディングの鉄骨の一部が曲がって、外壁には亀裂が走りました。当時、丸ビルの工事を受け持っていたのが、アメリカのフラージャー社という会社です。地震によって、このような被害がでるような建物ではなく、より頑丈な建物でなくては駄目だという事で、急遽、耐震補強を施すため、フラージャー社を施工から外しました。

この地震についても、高浜虚子が述べた文章があります。「丸の内ビルディング」という文章です。「一度大きな地震が揺つた為に、ビルディングの竣工がおくられて、昨年一杯かかることになった。又この冬の寒さを船河原町の家で辛抱しなければならぬのかと考えてゐたが漸く一月の二十六日にビルディングへ引越すことになった」と書いています。

話が前後しますが、高浜虚子は丸ビルに『ホトトギス』の発行所を構える計画で、入居の申し込みをしていました。三菱地所部は、

丸の内ビルディングの建設にあわせて、テナントや入居者募集の広告を出すのですが、高浜虚子はその記事を目にするのです。入居を決断した当時の経緯と心境については、先ほど紹介した随筆「丸の内ビルディング」に記しています。大正十二年四月に発表されたもので、すなわち、丸ビルへ入居した直後の文章です。

「社員其他ホトトギスに関係した人々は暗に不賛成の意を表してゐた。そんなハイカラな場所に此の地味なホトトギス発行所を持つて行くといふ事は何だか不調和で、何となくむしが好かぬらしかつた。併し私はさうは思はなかつた」「私をして丸の内ビルディングを借りようと決心せしめたのは必ずしも偶然とのみ言へなかつた。私がかねがね船河原町のホトトギス発行所に嫌らなかつた。普通の住宅としては適當かも知れんが事務所としては誠に不便である。（中略）どこかの貸事務所でも借りてもうすこし事務的のものが遣つて行きたい、といふ希望があつた。其希望は四五年前からあつた。（中略）其矢先であつた。新聞を見て、丸の内ビルディングに貸事務所のあることに思ひ到つたのは。そこで之を借りようと決心した」

このようないきさつがあり、完成の知らせを待っていた矢先に大きな地震があつたものの、その後は順調に工事が進み、大正十二年二月に丸ビルは完成するに至ります。ホトトギス発行所の入居後はどうだったのかと言いますと、虚子の感想として、「丸の内ビルディングに事務所を置いてゐるといふことで、何だか私達も丸の内ビルディングが自分のもののやうな心持がして出入してゐる」とあり、ワクワクとした気持ちも伝わってきます。発行する『ホトトギス』



図7 「(関東大震災絵葉書) 丸の内ビルディング震災前の撮影 (NO. 8)」〈93650105〉

誌上では、発行所の移転広告を掲載し、消息欄に「居は気を移すと申します。雑誌の上にも仕事も上にも何等か新面目を發揮して見たいと思ひます。除るにお待ち下さい」と記されています。

さて、こちらの新聞をご覧ください。丸ビル開館直前に出されたものですが、「食ふ物、買ふ物何でも彼でも御意の儘 頗る便利に出来上がった 丸の内ビルディング」と、見出しが出され、丸ビルの広告もいくつか掲載されています。丸ビルの完成が、当時の人々には大きな関心事であったのでしょう。

丸ビルは、地下が八六部屋、一階が五四部屋、二階が一〇一部屋、三階から八階までが五九四部屋、九階が一部屋ありまして、当時、日本一の規模を誇ったビルでした。こちらの絵葉書(図7)をご覧ください。当館の所蔵資料で、竣工当時の丸ビルを写しています。

次に紹介する本は、『安全第一ビルディング読本』です。これは、赤星陸治(一八七四〜一九四二)という人物が書いて

います。赤星陸治は、三菱地所の初代会長となる人物で、出版した当時は社長でした。高浜虚子とは、『ホトトギス』発行所の丸ビル移転をきっかけに出会いました。その後、虚子門下に入りまして、「赤星水竹居」という俳号を使って俳句をたしなみました。虚子と会ったのは、三菱地所の部長の頃です。また、虚子の没後に『虚子俳話録』を著しました。話が逸れましたが、この『安全第一ビルディング読本』は、丸ビルの建物内部の様子や使用方法を詳細に書き連ねてありますので、いくつか紹介します。

「廊下の巻」には、「右側に用のある人でもその前までは必ず左側を歩く事」、「必ず徐行をする事」というような事が書いてあります。「手洗い所の巻」では「手や顔を洗った人は後をよくきれいに始末しておく事」というような注意書があります。これは大正十五年に出た本ですが、とても分かりやすい内容で、全ての項目に理由が付けられています。例えば、「必ず徐行をする事」には、「廊下を走ったり飛んだりすると自他ともに危ない上に騒がしくて皆の迷惑になります」と記されています。これには丸ビルという建物が、丸ビル内に事務所を持って仕事をしている人の他、丸ビル見物に来るような田舎の人ももちろん、東京に住んでいる人もそうですが、丸ビルの中をぐるぐる見回ったりする人達もたくさんいて、訪れる人も含めての解説書の体裁に仕上がっています。

関東大震災と丸の内——文学者の体験した関東大震災——
丸ビル完成のわずか半年後に関東大震災が発生します。こちらは、

大正十二年九月七日付の『東京日日新聞』で、「焼土と化した丸の内」と題し、新聞社の屋上から撮影した写真が大きく掲載されています。このような惨状が写っていますが、丸の内の被害は他の地域と比べた場合、それほど甚大ではなかったことが後からわかってきました。こちら、九月九日付の『都新聞』には、「焼土と化した大建築の損害調」と題す、帝国劇場、丸ビル、郵船ビルなどの被害状況と損害額をまとめた記事があります。

実際、震災で火災による焼失を出したのは、警視庁と帝国劇場が主で、丸の内のビル街には大きな被害はなく、赤煉瓦の四軒長屋時代のビルディングも無事でした。ただ、後で触れますが、建設中の内外ビルディングは崩壊してしまいました。

関東大震災における文学者の動向については、「文学者の体験した関東大震災」とくり、話しを進めたいと思います。関東大震災について、文学者の書いたルポルタージュやエッセイや詩などの作品は、数多く存在しています。

地震直後に書いた人物が谷崎潤一郎です。「絶滅の箱根を奇跡的に逃れて」という文章を、『大阪朝日新聞』九月六日付に発表しました。震災の五日後です。続いて、竹久夢二（一八八四～一九三四）が「東京災難画信」を書き、坪内逍遙（一八五九～一九三五）は「大震災所感」を発表します。

文学雑誌は軒並み「震災記念号」のような題で特集号を発行しました。文学者達の手記や震災をテーマにした作品などを掲載しました。詩人や歌人の震災についての作品も、合同詩歌集の形でいくつ

か刊行されています。

この本は、当館七階の図書室にある、『散文詩集 噫東京』（図8）と題する一冊です。西条八十（一八九二～一九七〇）や生田春月（二八九二～一九三〇）、竹久夢二など、大勢の文学者が作品を寄せています。『散文詩集 噫東京』の中から、生田春月の「焼け跡の青い芽生え」という文章を紹介します。「それからまつすぐに丸ノ内の大通りになると、三菱原あたりの事務所の高樓は、多少の破損はあるが、火はまぬがれてゐる、帝劇は、どうして、どこから火を出したのであらうか、内部がすつかりやけて、一二等入口の大玄関の大理石の柱は、くすぼり、あの美しかった大階段もメチャメチャである」と記されています。

続いては、丸の内ビルディングの中で、関東大震災に遭遇した人の丸ビル脱出記を紹介します。

ホトトギス発行所には、池内たけし（一八八九～一九七四）という人物がいました。この日、高浜虚子は鎌倉におり、難を逃れました。『ホトトギス』誌上に掲載された、池内たけしの「鎌倉に行くまで」は、丸ビルを脱出



図8 『散文詩集 噫東京』
〈87502576〉

し、その被害状況を伝えるに、鎌倉へ会いに行くまでの出来事が詳細に綴られています。題には「震災日記」と銘打っており、ます。「ホトトギス十月

号雑誌校正中。最初何程の事もなからうと思つてゐたが、忽ち大激動となつたので驚愕面色を失ふ。校正の筆を捨てて卓子から離れ茫然として立ち上る。(中略)エレベータは最早停つてゐる。階段から下りる。階段は一杯の人である。(中略)遅れ走せに非常口の階段のあることを思ひ出す。電灯消へ、落ちた壁土に煙つた廊下を走る。真暗な非常口の階段には壁土とも煉瓦とも判らないものが落ちてゐる。其上を踏んでゐるが如く下る。地下室に下りてしまつて出道を失ふ。漸く外に遁れ出る」と、丸ビル内の大変緊迫した様子を克明に記録しています。

丸ビル内には、雑誌『婦人公論』の編集室もありました。そこには婦人公論の主幹であつた、嶋中雄作(一八八七—一九四九)がおりました。その嶋中雄作は、「丸の内ビルディング脱出記」を書いてあります。婦人公論編集室は七階にあり、そこで地震に遭遇し、丸ビルの外へ脱出するまでの様子が書かれています。こちらの文章を紹介したいと思います。「急に、思ひも寄らず、それこそ出し抜けに(僕には地鳴りも何んにも聞えなかつたから)、暴風雨に遭つた船のやうに床が傾斜して、後の壁がおつ被さやうに倒れかかつて来るかと思ふと、隣の部屋かその又隣の部屋と覚しき辺から激しい音が聞えて、「地震だな」と僕が感じた瞬間には、もう吾々の部屋の電気の笠が、そのもこのもガチャンガチャンと凄じい音を立てて、床の上に落ち散つてゐた」とあり、丸ビル自体は倒壊することはありません。嶋中はこの後に窓の外を見るのですが、煙がモク

モクと上がっていて、てつきり火事だと思ひ、「火事だ!」と叫びます。この煙は、建設途中の内外ビルディングの七階建ての建物が倒壊した後の砂煙だつたと、生々しく伝えてあります。

こちらは当館所蔵の絵葉書(図9)ですが、解説部分に、「二百名が生埋された内外ビルディング」とあります。この絵葉書により、嶋中の目にした光景が、はつきりと見て取れるかと思ひます。犠牲になつたのはビルディングの工事に携わっていた人達でした。

続いては、先ほど紹介しました竹久夢二の「東京災難画信」について取り上げていきます。夢二は、関東大震災が起きる直前に『都



図9 「(関東大震災絵葉書) 二百名が生埋された内外ビルディング (No.30) <93650111>

新聞』紙上で、小説「岬」の発表を開始しており、その関係から、関東大震災後の様子をスケッチブック片手に取材し、それをまとめた挿絵と文を『都新聞』で連載します。都新聞社は東京の新聞社の内、唯一被害を逃れたため、震災後もいち早く新聞を発行できたのです。

『都新聞』にはご覧のように、夢二の挿絵が掲

載されています。丸の内については、九月二十六日付「十三 庭園」の項で、日比谷公園の様子について触れています。「やさしい小径は、木々の緑がおのづから蔭をつくり、花壇の中には四季折々の花が咲きみだれ、大きな花のやうなパラソルは、肩の上で廻りながら歩いてゆく。(中略)そのかみの日比谷公園を、今は見るよしもない」と記し、被災者のバラックになった日比谷公園の様子と、そこにうな垂れて腰を落とす人々の姿を描写しています。

こちらの「十八 長い日曜日」の項も日比谷公園の様子を題材にしているのですが、ちょうど震災から一月経った十月一日の新聞に掲載されたものです。先ほどの挿絵と対象的に、とても震災の絵には見えないのですが、バラック街にお祭りのような出店が建ち並び、活気にあふれた公園の様子を絵に描いています。上方から震災見物にきた女連れについての記述など、とても非常識に思える人々の行動についても紹介しています。このような一文も、震災直後の当時の様子を後世に伝える、貴重な記録であると思われれます。

田山花袋は、『東京震災記』という本を出しているのですが、こちらには、七〇日近く経過した頃に、丸の内へ出かけた時のことを記した一文があります。花袋は、命カラガラ逃げた時の状況を昨日のこのように話す女連れを目にし、依然として震災当時の慌しさや漂っていると綴っています。

先ほどから述べてきましたが、丸の内界隈の被害はそれほど大きなものではありませんでした。内外ビルディングは倒壊してしまいましたが、四軒長屋時代のビルディングも無事でしたし、「一丁ニュー

ヨーク」時代のビルディングも無事で、他の地域のように壊滅的な被害を受けませんでした。震災後は、その丸の内の土地にこぞって企業が集中します。これは、震災から一月後の十月一日付『都新聞』の記事ですが、「三菱村に集中する千余の会社事務所 丸ビルだけでも十万を超える人の出入 何と言つても唯一の繁昌区」とあり、その裏付けになるかと思えます。

このような震災復興期の丸の内の状況を、権田保之助(一八八七〜一九五二)は、大正十三年に発表した「復興の都を眺めて」という随筆の中で、「焼け落ちた帝都の真ん中に、丸の内一帯の比較的に広くて建てる物の収容力の可なりに大きい部分が残されたということは復興への足掛かりとして東京市に取つては大変に仕合せなことであつた。(中略)丸の内一帯はまだ未完成の区域であつた。地震があつても無くつても、当然発展して行かねばならぬ運命にさいはいされてきた地域である。それが地震で一時に人が集まつて仕舞つた。そして今見る馬鹿な活気を呈した訳である」と述べ、かなり冷静な目で丸の内を分析しています。

川端康成(一八九九〜一九七二)も、昭和五年に発表した「新東京名所」という文章の中で、「新しい都市風景の丸の内は、反つて地震の焼跡では一等変わつてゐない場所ともいへるから面白い」と書いており、丸の内は地震の前と後でもそれほど変わらぬ街であるが、新東京の名所として位置付けられる場所になつていくというように述べています。

おわりに

最後に、これまでお話しましたところのまとめをいたします。明治から大正にかけては、丸の内を舞台にした小説や、丸の内のオフィス街を題材とした文学小説というようなものは、ほとんど書かれませんでした。高浜虚子が小説「丸の内」や「東京市」の中で試みた程度でした。キーワードとしては、日比谷公園、帝劇、帝国ホテルなどの名称は、たくさん取り上げられています。新しい名所的な意味合いが強かったのでしょうか。けれども、丸の内を舞台にして物語が展開するような作品はありませんでした。「文学者がみた丸の内の変遷」というまとめ方がしっくりする感じでした。文学者の視点を通して、明治から大正にかけての丸の内を知ることができる、と言えるでしょう。関東大震災についても、文学者が記録文学として関東大震災を書いた中に丸の内が登場する程度です。昭和期になりますと丸の内を舞台にした小説が誕生します。引き続き山崎から話がありますので、私の話はこれで終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。